
再びの一歩

reddresscoco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再びの一歩

【著者名】

ZZマーク

N6022M

【作者名】

reddresscoco

【あらすじ】

放課後の教室で回想。

山吹の西口が差す。

子供たちを吐き出した薄暗い教室。はるか昔に自分も座ったはずの小さすぎる机たち。

彼らは平仮名の勉強を始めたばかり。

縦一列に整然と並んだ黒板消しの跡。ひどく丁寧な日付の文字。一面、前と後ろにある黒板のうち、後ろの黒板にはいくつかの掲示物が貼られていたが、微塵も乱れたところがない。

「相変わらずだね」

ケルウが、教室の入口を入つてすぐのところに寄りかかつて立つ

ていた教師に言つた。西口は届かず、教師の顔は暗い。

「子供をこんな幾何学的な部屋に閉じ込めて。ルル」

「その呼び方はやめてちょうどい。いつの時代よ。」

「割と最近じやあなかったかな?」

一人にやにやと机をなでながら言つた。

「人生は長いわ。だから、ついこの前はかなり前よ。」

語尾のほうはもうそんなことはどうでもいい、といつた風に、ぶつきらぼつだつた。

「まあ、僕が袖振ひらひら虫だつた頃に比べればあつという間だけどね。」

彼は前世を覚えている。彼曰く。

もちろん、ルルと呼ばれた教師が何の抵抗もなくそんな話を受け入れるはずはない。いまだつて…。それでも彼の前では、信じないとは言わない。

西口が深くなる。伸びた日差しは壁により掛かっていた教師の顔をほんのりと照らす。短めにそろえられた髪は肩のあたりまで。そ

の教師の静かな美しさは、もしかした老いの、はかない気配に裏打ちされているのかもしれない。細いフレームの眼鏡の奥の目は、どんな悲しみにも揺らぐことがないという。

振袖ひらひら虫とは、蝶々のようなものだそうだ。

「本当にいるの？ その虫」

駅の出口からバスター・ミナルまで、傘の中に入れさせてもらつた時に聞いた。

「いつか見せてあげる。まだ発見されてない。」

それだけ言って、彼は違うバス停にすたすたと歩いて行った。あの頃は、彼らはまだ若かった。ルルとは、いつからかケルウが呼び出したのだった。規律、ルールを縮めただけだと言われても、この国では目立つ。

それから、何年過ぎただろう。腐れ縁とは、実際には腐りにくい。あるいは、縁に取り付いた、なにがしかの菌がじわじわと侵食して、やがては二つの者を丸ごと包んでしまうのかもしれない。

それでも、いいか。

カビの中には、ふわふわとした毛を出すものもいるといふ。そうすれば、誰かとぶつかつたって、痛くないから。かつてのようにはならなくて済む。もう、この街から逃げ出さなくて、いい。

「それで、今日は何の用？」

沈みきつた太陽は、今もどこかの町を照らしているのだろう。二人を照らすものは、星と満月と、緑色の非常灯だけだったが。

「いやなに、用つてことでもないんだが。」

そう言って、ルルの後ろを指差した。その視線はルルを抜け、非常灯の緑の光に染まつた暗い廊下を抜け、湿つた空気を湛える中庭を射ていた。

「もうすぐ……あと少し。……ほら、いまだ」

振り向けば、中庭がほのかに明るい。

「袖振ひらひら虫。君に見せよ」と思つて

ルルは思い切り窓を開けた。

自分の身長をゆうに超える大きさの、蝶。羽の色は桃色でほんのりと光つてゐる。燐粉は粉雪のよつたなきりめき。

「きれい……」

言つてから、気づいた。そんな言葉が、世界のどこかにあつたのだ。

「やつと、泣いた」

安堵のため息が漏れた。

「ゆらぎゆらめけ、ともしひよ」

ルルがはつと振り向いた。蝶の桃色の光が顔を照らしている。

「どうして、それを」

「昔君が持つてた小説の中で一番くたびれてたのをこいつそり借りてぱらぱら読んだんだ。その本の、一番最後のページに、赤いしるしが付いてた。」

「そう……」

「最近はあんまり読んでないんだろ?」

「まあね。でも、また読んでみようかしら」

蝶が飛び立つた。音もなく。

そうだ。この蝶ほどではないにしても、人生は長い……。

非常灯の中の人は、いままさに扉の向こうへ、踏み出そうとしていた。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6022m/>

再びの一歩

2011年1月16日09時37分発行